

豊かなかごしまの 農畜産物を もつとお届けします!!

「安心・安全・新食料供給基地かごしま」

鹿児島県は、南北600kmに広がる県土と温暖な気候を生かして、全国有数の食料供給県として、大きな役割を担っています。

現在、世界的な食料事情の変化の中、輸入農産物に対する安全性への不安や、我が国の食料自給率が先進国の中で最も低水準にあることに対する懸念などから、国内農業生産に対する国民の期待がこれまで以上に高まってきています。

このような中、県では、「かごしま食と農の県民条例に基づく基本方針」や「食と農の先進県づくり大綱」などに基つき、農業の更なる振興を図るため、さまざまな施策を積極的に展開しています。

今回の特集では、県産農畜産物の安心・安全への取り組みや耕作放棄地対策、農業を支える担い手の確保・育成など、「安心・安全・新食料供給基地」の形成に向けた取り組みを紹介します。



息子夫婦の浩木さん、真弓さんと効率のいい連携作業での収穫。

「安心・安全」はいかがですか

沖永良部のばれいしょ
春のばれいしょ

鹿児島市から南へおよそ540 kmにある沖永良部島では、全国に先駆けて春ばれいしょの出荷が始まっている。

「生産者一人一人が誇りを持って栽培したおいしいばれいしょができました。新鮮なものをお届けしています」と生産者のリーダーであるブランドマスターの川村秀文さん。緑肥作物やたい肥を使った土づくりや、太陽熱を利用した土壌消毒など環境にやさしい農業に取り組んでいる。

「沖永良部のばれいしょ」は、平成7年に「かごしまブランド産地」に指定され、春の訪れを告げる鹿



ミネラルたっぷりの赤土で育ったまるまるとした沖永良部のばれいしょ。

かごしまブランド産地の取り組み



「ほくほくして煮くすれしにくいばれいしょは、煮物やグラタンなどにも相性抜群です」と川村さん。

児島の代表的な野菜として全国で高い評価を受けている。平成18年には、安心・安全を考えた基準に沿って生産工程管理を行う生産者の取り組みを審査・認証する「かごしまの農林水産物認証制度」の認証も取得している。

「認証の取得により、生産履歴をしっかりと記帳するなど、各生産者の管理意識も高まりました。認証も毎年更新し、4回目となり、さらに高品質で安定供給に取り組んでいます。今後の目標は、PRにも力を入れ、消費者の信頼を確保したより安心・安全なブランドを確立していきたいと思えます」。



市場や消費者から高く評価され、県内他産地のモデルとなる15品目21産地が「かごしまブランド産地」として指定されています。



安全性を考慮した生産・出荷基準と消費者が安心できる管理体制基準に基づく「かごしまの農林水産物認証制度」。現在42品目80団体(98件)が認証されています。

豊かなかごしまの
農畜産物を
もっとお届けします！

豊かな産地づくりで農業生産力・食料自給率の向上を

鹿兒島黒牛を支える人々



元気な子牛を育てるために、個体別の管理を行っている。



「後継者もいるので、安心してさらによい経営に取り組んでいきたい」と藤岡さん。

大崎町で鹿兒島黒牛の子牛を生産している藤岡数雄さん。妻と長男の3人で親牛120頭を、また次男は独立して同一敷地内で50頭を飼育している。「以前、経営改善のための取り組みが評価され、農林水産祭畜産部門で天皇杯などをいただいた時には、本当に嬉しかったですね」と藤岡さん。徹底した省力化や低コスト化を行いながら、環境にも配慮した経営に取り組んできた。

経費を抑えるため、機械の修理や点検は自ら行う。また、20haの畑で牧草などを生産するとともに、地域の未利用資源である焼酎粕を飼料として活用している。さらに、家畜の排泄物も発酵処理し、たい肥として飼料畑に還元している。このように、地域にもともとあり、利用されてこなかった資源をうまく地域内で循環させる試みは、これからの農業には欠かせない取り組み。

経営面では、家族経営協定を締結。「役割分担や給料、休みを明確にすることで、各自がより責任感を持ちながら働きやすい環境になった」という。

「今後は、親牛を200頭規模に拡大し、経営面では法人化を目指していきたいです。また、肉質面でも優れた親牛の改良に努め、さらにはいい子牛を生産することができればと思います。手間と愛情を込めて安心・安全な鹿兒島黒牛を育てていますので、より多くの消費者に本物の味を口にしたいただけたら嬉しいですね」。



左から長男の眞澄さん、妻の美江子さん、藤岡さん、次男の悦郎さん。



作業は共同で連続して一気に行っている。

地域の課題は地域に答えが



水田営農組合の皆さん。左から、福元健作さん、紺屋正文さん、福元康光さん。

鹿屋市吾平町境田地区では、農家の高齢化や後継者不足により、耕作放棄地の拡大が懸念されていた。そのような中、地域の農業を将来にわたって地域の住民で守ろうと、平成19年に集落内の農地などの活用を話し合う農用地利用改善組合と農作業を受託する水田営農組合が設立された。水田営農組合は、組合員数3名。早期水稲の作業後に農作業を受託できる水稲農家と、自家用の飼料を生産したい畜産農家とが連携し、飼料用稲を生産・供給している。



飼料用稲専用品種を栽培。

「以前は、輸入飼料(ワラ)を利用していました。良質で価格も安定した地元産の飼料を年中確保できるようになり、大変助かっています」と畜産農家の紺屋さん。

また、組合長の福元康光さんは「共同作業は、効率的で楽しいです。あぜ道の除草管理なども行うため、高齢者の方々が安心して農地を預けられると喜んでいます。これからも地域の農業振興を担っていくように、地域の方々と協力しながら取り組んでいきます」と嬉しそうに語る。

このような取り組みは、吾平町の吾平東・下名東・下名西地区でも広がっており、地域の農業振興に明るい兆しとなっている。



集落での話し合い

〈集落営農による担い手育成と耕作放棄地対策〉

豊かなかごしまの
農畜産物を
もっとお届けします！

豊かな産地づくりで農業生産力・食料自給率の向上を

茶業振興で地域とともに
発展する企業活動を



シルバー人材センターでの研修後の植え付け作業

志布志市有明町にある農業生産法人有明社いろは農園有明は、生葉の生産から加工までの一貫経営を行う法人。農家の高齢化に伴い拡大している荒園化を進めている。また、農家への技術指導や、シルバー人材センターを通じて年間約4千人を雇用するなど、地域への貢献が高く評価されている。

「大型機械を効率的に利用できるように茶園を集約。収穫時期が異なる品種をバランスよく栽培して安定した経営に取り組んでいます」と代表取締役の永田武人さん。

需要に対応した、新たな販売戦略として、抗アレルギーの機能性が注目される品種「べいふうき」も導入している。



耕作放棄地を1、2年かけて整備した茶園。

「今後も畑地かんがいの水を有効利用して、5年後に栽培面積260haを目標に拡大したいと思っています。地域をどう守り発展させていくかが課題です。茶業を通じて農協や行政機関、地域の高齢者とも連携しながら地域に貢献をしていきたいと思っています」。



「安心・安全なよいお茶を作るために、良質な土づくりにこだわった栽培をしています」と永田さん。



窪田さん一家。「経験を経て、再び海外で視野を広げたいと感じるようになった」と敏さん。

あなたもかごしまで農業をしてみませんか？

農業大学卒業生のその後

「肉用牛経営は、努力すればするほど成果がでるので、やりがいがあります」と語るのは、霧島市国分の窪田敏さんと妻の加奈子さん。二人は県立農業大学校畜産学部を卒業後、それぞれアメリカ、デンマークで海外研修を受け、現在は肉用牛経営を営む敏さんの実家の窪田農場で子牛を育成している。

敏さんは、幼い頃から自然と家業を手伝っており、一方、加奈子さんは、もともと動物好きで親戚が牛を飼っていたことがきっかけで、畜産に興味を持ったという。

「農業大学校は実技も多く、高度な子牛生産の技術を実践的に学びました。卒業後のアメ

リカ研修では、大規模で機械化されている畜産経営を体感できました」。その経験を現在の肉用牛経営に生かして、手作りの牛舎や、ほ乳ロボットを導入するなど、省力化に向けて取り組んでいる。

「まだまだ懸命に努力している最中です。昨年、子牛の品評会で第二位に選ばれた時には、本当に嬉しかったですね」と笑顔の敏さん。

「今後は、牛舎の整備をして機械の導入を図り、親牛300頭規模に拡大するのが目標です。いずれは放牧体系や、子牛の育成から肥育までの一貫経営を実現することができればと思います」。



広々とした手作りの牛舎。飼料も自家栽培。

新規就農に興味のある方は、お気軽にご相談ください。

専属の就農アドバイザーが新規就農者に対する各種支援制度や市町村の受け入れ状況などの情報を提供します。また、ホームページでの情報提供やEメールでの就農相談も受け付けています。

なお、県外事務所や、地域振興局・支庁などの農業改良普及業務を担当する部署でも、就農相談に応じています。

(社) 鹿児島県農業・農村振興協会(県庁2階)

TEL099(213)7223 <http://www.ka-nosinkyo.net/syunou/index.html>

